

# 社会変容と非正規雇用選好の相関

## — 新たなキャリア教育の必要性 —

柝 潤 友子

はじめに

批評家である宇野常寛は自著（2008）の文庫化に際して追補された対談で、「僕は誰もが正社員になれた／させられた社会よりも、本人が望めばフリーターでも生きていける社会をつくるほうがいいと思っている」<sup>1</sup>と語った。本稿の考察はこの発想に虚をつかれた思いをもったところから始まっている。わが国では現在、小学校に始まって大学まで、職業準備教育および職業教育（以下キャリア・ガイダンスあるいはキャリア教育も同義で使う）が行われているが、その最終的な到着点としての安定的雇用すなわちフリーターの回避という前提は疑ってこなかったからである（本稿ではこれを正社員主義と呼ぶ）。小学校から高校までは、文部科学省による「小学校・中学校・高校を通じたキャリア教育の推進」施策のもと、大学におけるそれは、企業側からの要望／圧力により、キャリア・ガイダンスがそれぞれ実施されている。それに加えて、フリーターやニートの急増という変化を受けて、経済産業省は「社会人基礎力」、厚生労働省は「就職基礎能力」なるものをあたかも社会人になるための資格要件のように提示したため、大学は目下それらをも教育に盛り込もうと努めているところである。教育行政関係者のあいだでは「2004年はキャリア教育元年」という言葉が飛び交い、大学はかかる能力を具備した学生の産出の場に様変わりせざるをえない状況に置かれるようになった。ここでも前提は正規雇用を目指すことに変わりはない<sup>2</sup>。

しかし、教育現場にいて日頃から学生に狭義広義の「キャリア・ガイダンス」を施そうとしている身としては、この方針に違和感をぬぐえずにいる。というのも、本来の大学としての教育が脇に追いやられてしまうとか、大学が就職予備校化しているとか、学生があたかもコモディティであるかのごとく先述の資格要件に照らした「検品」をしているようだといった、当然の諸々の反発もあるのだが、もっと基本的なところで、若年層における価値観のシフト—たとえば非正規雇用を選好する傾向など—を感じているからである。もしシフトが起きているなら、大学は産業界と行政の両方の要請には応えようとキャリア教育を行ってきたが、果たして学生の立場から見てそれが適切な教育なのかを明確に問うて来なかったかもしれないのだ。キャリア教育は学

生自身にとってダイレクトに益になるものはずなのに、なぜか彼らが受身的、さらには逃げ腰なのは（もちろん、それとは対極と言ってよい、主体的かつ積極的に就職活動をする学生がいるのは知っているが、それについては脚注iiiを参照のこと）、今までのキャリア教育の取り組みが不足であったか、はたまた過剰であったかというよりは、的外れではなかったかを問わざるをえないことにもなる。周知の通りすでに労働市場の三分の一は非正規雇用（フリーターと同義）という現実がある<sup>i</sup>。フリーターが多くの家計で主たる稼ぎ手になっている時代を迎えているのである<sup>ii</sup>。頑張っても卒業時に正社員になれるとは限らないという現実、またなれたとしても正社員の置かれる厳しい（らしい）現状は学生の就職準備を及び腰のものにもしている。正社員を目指す学生はそれとして、若者の価値観が変容しつつあるのに、キャリア教育は往年のままになっているのではないかということに思いをはせることになったのが冒頭に示した宇野の発言である。

宇野は当然の反応を見越すように、その前段では「それは強者の論理だ、というテンプレート的な反論が、必ず来る」と言った上で、「けれど、本当にそうか、ちゃんと考えてほしいんですよ。転職や結婚の自由がこの二十年でどれだけ広がったか、……。〔中略〕戦後の『安定』の代価だった『不自由』がある限り、これらのものは絶対に手に入らなかったと思う。終身雇用を支えられた会社共同体が崩壊してくれたおかげで、どれだけ僕は自由になったか。」と続けた。同時に、「もちろん、社会保障の混乱やセーフティネットの不備は大問題で、これは早急に手当てしなければならない」と言い添えてはいる<sup>3</sup>。正規雇用の「代価」とは転勤、長時間残業、有給休暇不完全取得、成果主義のプレッシャー等々であるが、これらからフリーである〈人間らしい〉働き方を目指すとしたらパートタイマーを選択するという発想には一理あると言えるだろう。時代はすでに、とくに若年労働者は、正社員であるかどうかよりも別のところに価値を見いだす社会を迎えているのかも知れない。正社員主義はすでに陳腐化しているのではないかということである。なぜ若者はフリーターも選択肢に入れて職業選択をするのか。当然ながらその選択には防衛機制による消極的選択も含まれていることだろう。本稿では消極的／積極的両方のフリーター選択の要因に焦点を当てて考察してみる。まず日本で若年層の非正規雇用増加要因について産業界と教育界の知見をレビューする。いわば非正規を選択せざるをえない側面からの検討である。つぎに、雇用システムはさまざまな側面が一体となった社会システムであるが、本稿で

i 2011年12月14日の厚生労働省による発表では、2011年のパートタイム労働者の総合実態調査から、従業員に占めるパート労働者の割合は27.0%で、2006年に実施した前回調査に比べ1.3ポイント上昇した。（以上は2011年12月15日付け東京新聞から）。1,700万人を超える非正規の内訳は主婦900万人、主婦を除く高齢者（60歳以上）250万人、学生150万人（内閣府・労働力調査より）。残りは400万人強。

ii 「高度成長期以来の日本社会において、非正規労働者とは（略）主婦労働力としてのパートタイマーと、（略）学生労働力としてのアルバイトが二大勢力だった」のが、ここにきて「家計維持的非正規が目に見える規模になり、セーフティネットがちゃんと張られていないことが明らかになったから騒ぎになった」。（海老原嗣生・荻野進介2011年『日本人はどのように仕事をしてきたか』中公新書ラクレ p.299の濱口桂一郎の発言）。

は社会変容の観点からの考察を加える。さらに、戦後の日本社会の変容とポストモダンの権力論から現代の状況を確認し、必然的に価値観の変容が起きている可能性、すなわち正規／非正規とは別次元の基準の登場を考察してみたい。

## 若年非正規雇用増加の要因

ここではこの問題に関して丁寧な検証をしている太郎丸博（2009）<sup>4</sup>の研究に負って記述する。それによると、非正規雇用が1980年代以降増加したこと、そしてとくに若年層でその増加が急速であることについて4つの原因仮説が提出されている：①規制緩和仮説、②景気循環仮説、③若者墮落仮説、④構造変動仮説、である。以下順に説明する。

### ① 規制緩和仮説

規制緩和を原因とするというのは、派遣労働者に対する規制が緩和されたことを指している。1986年に労働者派遣法が成立するまでは、派遣労働は原則禁止であったが、2004年には製造業を含むほとんどすべての業務に関して労働者の派遣が可能になったことで、非正規雇用が増加したというものである。しかし、2007年の労働力調査詳細結果によれば、非正規雇用労働者1,730万人のうち、派遣労働者はたったの130万人にすぎない。非正規雇用の大多数はパート・アルバイトであり、その増加が非正規雇用の増加の主要な原因である。2008年にはパートタイム労働法が改正され、それは基本的にパートタイム労働者を保護する方向の改正であって、むしろ規制は強化されているのである。よって規制緩和仮説は成立しない。

### ② 景気循環仮説

景気循環仮説とは、景気の循環によって非正規雇用が増減するという仮説である。景気の悪化は失業率となって現れるが、それが中高年よりも若年層にヨリ強く出るため若者の非正規雇用が増えると説明する。この説が正しければ、とくにバブル崩壊後の非正規雇用率は上がるはずである。ところが非正規雇用は1985年から2007年までずっと増加の傾向を示している。これは景気が回復しても非正規雇用は減らないということも逆証明しているわけで、よって景気循環仮説は排除される。因みに太郎丸は景気循環説に入る、「ロストジェネレーション」説（大学卒業時が就職氷河期に当たった世代のことで、おおむね1972年～1982年生まれとされる。この世代はその後、景気が回復しても正社員と採用されにくいとする説）に対しても統計データを駆使してそれを退けている。

### ③ 若者墮落仮説

若年墮落仮説とは、現在の若者が以前の若者よりも道徳的に墮落したから非正規雇用率が上がったとする仮説である。この視点については、NHKによる継続的識調査から、労働に関する若者の意識は20年間に渡って顕著な変化が見られない。仕事志向の低下は若者に限らずあらゆる

る年代で生じているが、これは仕事と家庭の両立を望む人が増えたからで、これを墮落とは呼べない。何より、非正規雇用は全ての年代で上昇しているのである。また、太郎丸は「やりたいこと」志向の強まりと非正規雇用の増加の関連にも検討を加えているが、それが若者の非正規雇用の増加につながっているとことはなさそうであると結論づけた。

#### ④ 構造変動仮説

構造変動仮説とは、社会や経済の構造が変化したために非正規雇用が増加したとする仮説である。それには a. サービス産業化仮説、b. グローバル化仮説の2つを挙げている。

a. サービス産業化仮説：近代化の過程で、それまで農林水産業に従事していた人口が工業に移り、現代はサービス産業に従事する人口が増えている。サービス産業では他の産業に比べて非正規雇用の比率が上がると考えるという仮説である。日本のサービス産業化は68%で、米国(77%)、英国(78%)と比べてサービス産業化は進んでいないものの、国勢調査の産業別人口割合の推移を見ると、確かに非正規雇用の比率が高い。ということはこの仮説はかなり非正規雇用の増加を説明できる。ただし、20年前と比べると他の産業でも非正規雇用率が増加しているため、非正規雇用率増加の原因をサービス産業ひとりでは説明しきれない。

b. グローバル化仮説：経済のグローバル化によって企業間の競争が激化し、人経費抑制の圧力が高まり、非正規雇用が生じたと考える仮説である。グローバル化が非正規雇用を生んだという直接的証拠はないものの、間接的に支持するいくつかの証拠は提出されている。よって非正規雇用の増加の背景にグローバル化があったと考えるのは妥当のようである。

以上から、非正規雇用者増加の要因として④構造変動仮説の a. サービス産業化仮説と b. グローバル化仮説が挙げられた。これはいわば産業界からの説明可能性であるが、加えて、荻谷剛彦(2001)<sup>5</sup>の研究を基に教育界、すなわち若年労働者の供給側における要因を探ってみることにしよう。

一般に大学生の学力と学習意欲の低下が話題になる中で、親世代の所得と階層の格差が子供の学力に反映していることは先進国ではよく知られるところとなっている。荻谷も、日本において教育を媒介とした社会的選抜が、とりわけ1960年代の高校進学率の高まりと共に大衆的な規模で行われてきたことを指摘する。この教育機会拡大により、社会を個人の属性ではなく能力と努力からなるメリットが重視されるメリトクラシー・モデルで捉える見方が成立した。そのメリットを構成する能力と努力のうち、能力については出身階層の影響を認める研究が内外ともに多数あるが、努力と出身階層との相関についてはこれまで等閑視されてきたところ、荻谷がそこに焦点を当て、以下のことを明らかにした。高校生の学校外での学習時間を努力の指標として1979年と1997年の調査結果を比較した結果、18年間で努力の総量が減少していること、その減少は社会階層によって差があることが確認された。1979年の時点では高校ランクの差で努力総量の

差を説明できたのが、1997年には、とくに母親の学歴といった階層要因が努力総量に影響を及ぼしていることが明らかになったのである。子供たちの怠惰の原因を「豊かな社会」の出現に求める一般的な見方に対し、階層による能力格差の影になっていた学習意欲・興味・関心の低下の実態は、全体の水準低下と同時に、社会階層格差を原因として進んでいることが示されたのである。さらに高校生の自己有能感を3つの階層に分けて比較したところ、下位グループのみ、「将来のことを考えるより今の生活を楽しみたい」と思う生徒ほど、さらには、「あくせく勉強してよい学校やよい会社に入っても将来の生活にたいした違いはない」と思う生徒ほど、「自分には人よりすぐれたところがある」と思っていることがわかった。すなわち、「業績主義的価値から離脱することが社会階層の相対的に低い生徒たちにとっては〈自信〉を高める」<sup>6</sup> 方便になっているという結果であった。このような生徒たちは業績を高める努力を回避したまま、高校を中退するかあるいは卒業をして就職か進学をする。これは高校までの結果であるが、出身階層が原因であれば、続く高等教育の場でもこの傾向は変わらないことになる。ここから、キャリア教育も含めた教育現場の問題としては、努力不足を当人のみに帰因させてきた誤りを是正していくことが挙げられるだろうが、同時にこのような生徒／学生はよりよい就職先を求める努力はしないであろうこと、その戦線から離脱することで〈自信〉を保持するであろうと言えそうである。その結果彼らの多くは非正規雇用を選ばざるをえなくなる。端的に言えば、教育という階層再生産装置が継続的に非正規雇用者産出してきていると言えるのである<sup>iii</sup>。社会の階層化が進み、階層間移動が困難となれば、すなわち階層内が全世界であれば（そしてメタ知識をもたなければ）焦燥感も閉塞感ももちにくく、非正規雇用の身分に甘んじつづけることになるだろう。

以上、産業界、教育界から非正規雇用者増加の要因を見てきた。つぎに社会の変化とからめてその要因のさらなる説明可能性を探ってみたいが、それは1995年以降の現代社会で起きている変化が非正規雇用増加に影響を及ぼしているかもしれない可能性のことでもある。

## 社会の変遷

現代がどんな社会なのか。それを捉えることで非正規雇用増加の説明ができる何かが見えてくるかもしれない。以下に見る社会に対する命名あるいは区分はいずれも恣意的なものではある。しかしそのシニフィアンは何らかのシニフィエ（意味）を浮かび上がらせてくれていることは確かである。

iii ここから、下位グループの生徒／学生に社会資本や所得の格差が階層を再生産している事実を教えるのは酷であるとも言える。階層上位層にいる者はこうしたメタ知識を自ら身につけ、下位層が被る不利益を奮励の糧としてさらに努力を重ねることだろう。それは成績にも就活の取り組みにも反映されるに違いない。

ウルリヒ・ベック (1986/1998) の『危険社会』, ジークムント・バウマン (2000/2001) の『リキッド・モダニティ』, デイヴィッド・ライアン (2001/2002) の『監視社会』, 等々, 強調点の移動で著作タイトルそのままの社会のくくり方があるが, 日本の現状はどのように捉えるべきなのだろうか。〈今〉を捉えることは常に難しく, ここに掲げた〇〇社会にしても, ある程度進行してからハインドサイトで命名されたものである。〈今〉を敏感に感じて表現できるのは, 現代美術のアーティストか一部の文学者のイマジネーションに特権的に限られるのかもしれない。ここでは「時代の精神を築き上げるものは何だろうと考えたとき, 社会的事件ではなく, むしろ物語系カルチャーを追う方が有効ではないか」, 「物語系カルチャーという最も細分化されているジャンルを分析すると, 逆説的に社会の全体像が見えてくるのではないか」,<sup>7</sup> という宇野の立場に拠ってみよう。

ところで, かつて社会学者の見田宗介 (1995) が示し<sup>8</sup>, 大澤真幸 (1996) が受け継いだ戦後日本の精神史の区分がある。すなわち, 戦後から 45 年の日本社会を「理想の時代」「夢の時代」「虚構の時代」と進行してきたとする区分である。大澤はそれを, 真ん中の「夢」の時代は前の「理想」と, 後の「虚構」とに引き裂いてそれぞれに取り込めるとして, 「理想の時代」「虚構の時代」の二段階に圧縮し直し<sup>9</sup>, その転換が生じた時期は 1970 年前後であるとした。すなわち戦後の日本社会は, 「人々が理想との関係において現実を秩序だてていた段階から, 虚構との関係において現実を秩序だてる段階」<sup>10</sup>へと転換してきたと見立てたのである。そのとき, 1995 年 3 月 20 日のオウム真理教によるテロ事件を「虚構の時代」の終焉を画期する事象のひとつと位置づけたのであった。そしてこの進行の先に続く新しい時代を, 大澤は「不可能性の時代」と命名したのだが, 東浩紀はそれにほぼ対応する時期を「動物の時代」と名づけて, ゲームに没入するオタクたちの, 現実への逃避 (からの, ではなく) をする姿に時代の代表性を見いだそうとしたのであった<sup>11</sup>。佐々木敦 (2009) の言葉を借りると, 東はここで「オタク」という独特な存在を, 二十一世紀初頭 (「ゼロ年代」初頭) の「ニッポン」の「現実=現在」を読み解くための解読格子として用いて……「オタク」の様態を「動物化」と名づけた<sup>12</sup>, となる。大澤は東の命名に対し, 「半分賛成で, 半分は違和感を覚えた」<sup>13</sup>と述べているが, そのわけは, 大澤は現実との対語としての〈反現実〉を用いて時代区分をしてきたからで, 「動物」では平仄が合わないというのだろう。一方の東に, アレクサンドル・コジェーヴ (『ヘーゲル読解入門』1947・1968 に注記を加筆/1987) の「大きな物語が失われたあと, 人々にはもはや『動物』と『スノビズム』の二つの選択肢しか残されていなかった」を踏まえて, スノビズムの方は日本では 1995 年にその時代精神としての役割が終わり, それに続く時代は「動物化」と名づけるのがよからう<sup>14</sup>, という理由があったのである。宇野によれば, 世の中が個人の生に意味を与えず, 目的も与えず, 価値を示してくれないことことに絶望した人々は, 「～する/～した」という行為を評価されるのではなく「である/～ではない」という自己像 (キャラクター的実存) に承認を得

ることで空白を埋めようとした。これが東のいう「動物化」の謂である。「……『キャラクター』という言葉は現代において, 随分と奇妙な使われ方をしている。国内ではゼロ年代に入り, 教室やオフィス, あるいは家族など, 特定の共同体の中で共有されるその人のイメージを『キャラクター』と呼ぶことが定着」したが, その背景には「日常を過ごす場としての小さな共同体 (家族, 学級, 友人関係など) を一種の『物語』のようなものとして解釈し, そこで与えられる (相対的な) 位置を『キャラクター』のようなものとして解釈する思考様式が広く浸透しはじめたことを示している」と宇野は分析する。なぜこのような意識が浸透したのか。宇野曰く「それは端的に言えば社会の流動性がこの十年で上昇したから」<sup>15</sup>である。「キャラクター」について, 単にそれは近代的自我と比較した場合, 自分を統一する概念として一緒ではないか, 程度の差でしかないのではないかという疑問に対し岡田斗司男はつぎのように説明する<sup>16</sup>。決定的な差は, キャラ (キャラクター) は自分で設定可能であると同時に, 人から貼られるものであるという点であり, 近代的自我よりも「緩い」ものである, と。この「緩さ」がつぎの「拡張現実」を支持する。

ところで当の宇野自身は, 大澤が「不可能性の時代」と呼び, 東が「動物の時代」と名づけた 1995 年以降を「拡張現実 (Augmented Reality) の時代」と命名する。宇野の解釈では, 大澤は現代を人々が虚構 (大きな物語の文化的仮構) に対して虚構と知りつつ「あえて」コミットする「アイロニカルな没入」をする時代としたが, 一方の東は「アイロニカルな没入」のために必要となる自意識の操作, 洗練は現代においてはアーキテクチャが肩代わりしていると見た<sup>17</sup>。この東の視点を宇野は評価するものの, それが「最先端として通用していたのはやはり二〇〇〇年くらいまでだった」<sup>18</sup>という (すなわち東は〈今〉から遅れをとっている)。この場合のアーキテクチャとは「法システム, あるいは Windows や mixi, あるいは郊外の大規模ショッピングセンターのようなインフラ」のことで, 「コミュニティはそんな単一の強大なインフラの上で展開される多種多様な消費活動や人間関係のこと」<sup>19</sup>である。ならば「アーキテクチャによる没入」のその先は何なのか。宇野によれば, それは「……言ってみればソーシャルメディア的なもの」<sup>20</sup>で, 「最も明確な転換点は九・一一のアメリカの同時多発テロ」であるという。「社会のネットワーク化やグローバル資本主義の発達によって, これまでだったら繋がらなかったはずのものが繋がると, 同時に衝突や対立も生まれてくる。……もはや, そうした人たちが出てくることを織り込み済みで社会を考えなければいけない時代」で, 「あとはそれらが衝突しないようにどう調整するかという関係性の問題だけが残されている」<sup>21</sup>。「世の中にもっとコミットしなければだめだ, ということじゃなく, 「たとえコミットしていないつもりで, してしまっている, 自動的にゲームに参加させられているのが現代社会」<sup>22</sup>なのだ。別言すると, 「貨幣と情報のネットワークが世界をひとつにつなげる〈外部〉が消失した世界において, 虚構は〈外部〉=もうひとつの現実として機能するのではなく, むしろ現実の〈内部〉を多重化し, 拡張する存在として機能」<sup>23</sup>するのだ。このとき国民国家は貨幣と情報のネットワークの下位に従属しており<sup>24</sup>, 「こ

の変化をもっとも端的に表現しているのが『仮想現実 (VR) から拡張現実 (AR) へ』というテーゼだ (同) というわけである。「ネットワークに漂うキャラクター群に支えられた現代日本のキャラクターたちは、まさに現実の風景に介入し、世界を多重化する存在として機能し始めている」<sup>25</sup> というのだ。「私たちは、いつの間にか現実を実に多重なものとして把握している」<sup>26</sup>。それを岡田は「多重人格は来るべき社会の現代病といえる」<sup>27</sup> と表現する。

ジャン＝フランソワ・リオタール (1979) は『ポスト・モダンの条件』で、ポスト・モダンをいわば「大きな物語の終焉」で特徴づけた。「大きな物語」とは、たとえばマルクス主義でもいいし、その他、正義、革命、大儀、価値、秩序、等々もいいたろう。本稿に引き寄せて言えば、立身出世主義、正社員主義、自己実現主義 (それらはいずれもイデオロギー化していると考えられるので敢えて主義をつけた) なども「大きな物語」である。それは誰もが、ある種のヒーローを目指す物語である。宇野は、「ビッグ・ブラザーが仮構し続けた大きな物語がその壊死とともに失効し、小さな物語が無数に乱立する世界が訪れた時代、それがリトル・ピープル<sup>iv</sup>の時代だ」<sup>28</sup> という。さらに続けて、「それは偉大な父 (兄弟) = ビッグ・ブラザーには誰もなれない時代であり、同時に誰もが否応なく矮小な父<sup>v</sup> = リトル・ピープルとして機能してしまう時代である」と。また、「村上春樹は、ビッグ・ブラザーには誰もなれないことには敏感だったが、誰もが不可避にリトル・ピープルとして機能してしまうことには鈍感だった」と、村上の想像力が、(今のところ) 世界に追いつかれつつあることを宇野は示唆する。「外部を喪った世界で、小さな父 = リトル・ピープルたちが永遠にゲーム = 自己目的化したコミュニケーションを繰り返す (略)。市場の無意識のもたらす力は、無数の人々の欲望の集積が生む力は、ときに偉大な作家の自意識を凌駕する」<sup>29</sup> というのだ。

宇野は「虚構の時代」から (逃避的ではない) 「拡張現実」へ移行した現代を、別言でまとめている<sup>30</sup>。すなわち「大きな物語」から「大きなゲーム」へ、である：曰く、『『ゲーム』』というルールに縛られた閉鎖的な戦いを想像しますが、今流行っているトレーディングカードゲームなどは無限にカードが増殖していき、既存のルールに当てはまらないカードが発売されるとルール自体も書き換わる。これはマイノリティが社会に許容されていく過程と一緒です」と。マイノリティがシステムの一部になる中で、全体のシステムの書き換えを促す。そして宇野はこれを「革命からハッキングへ」と呼び、「グローバル化を受け入れながら、内側から進化させる。これが新しい時代の革命のやり方なのではないでしょうか。」 (同) と主張する。電子ネットワークのアーキテクチャのなか、とくに若者は、それぞれのアーキテクチャル環境にハッキングを繰り返して世界を自分仕様にカスタマイズしているということであるなら、そこには被抑圧感もなければ、焦燥感もないだろう。キャラを取り替えて現実を多重化していくのが現代人というなら、

iv 村上春樹の小説「1Q84」に出てくる超自然的存在の名前。

v この場合の「父」とは象徴的な言葉で、決定者としてその責任を負う存在のことである。(p.247)

曜日毎にお稽古事に通っている子供の姿が浮かんでくるが、このネオテニーも時代の特徴なのだろう。従来の職業キャリアが「すざろく」よろしく目標に向かう目的論的イメージなら、新時代のそれは、キャラを貼り替えながらも全体としては (当人ならでの) 統一感を保って移動をするゴーカー的循環論的イメージと言えないだろうか。

## 考察

ここでは「拡張現実」の社会と非正規雇用の増加との関連について考察をするが、まずは現代の若者と社会の接点は何から考えてみたい。そのつぎにフーコーに代表される近代権力論の視点からも考察してみることにしよう。

学校を出ただけでは社会人と呼ばれてこなかった。これは一般的了解事項と言っていいだろう。仕事を得て、暗れて社会人となるのだ。そのときの身分は、アルバイトやパートタイマーではなく、正規雇用のそれである。すなわち個人と社会とのインターフェースは定職ということである。人が職に就いていない、あるいは職を失うということは、社会における足場を失っている感覚をもつことと同義でもあったのである。

さて、「拡張現実」の時代の若者にとっての社会との接点は何か。それはケータイ端末である、と言ってみる。そうであれば、彼らにとっては仕事が正規かどうかよりも、ケータイ端末を携帯しているかどうかのほうが重大な問題であるのだ。なぜなら前項で見たとおり、ネットにつながることでさえできれば、現実はいくらでも多重化でき、社会的に存在できるからである。一昔前なら定職の有無が社会人としての存立基盤であったのが、現代はケータイ端末によるつながりこそが社会的存在を保証するというわけである。ここで宇野の冒頭の発言を思い出そう：本人が望めばフリーターでも生きていける社会がいい。よく読むと、宇野はフリーターがいいと言っているのではない。フリーターでも生きていける社会がいいと言っているのである。「生きていける」の意味は、生物学的、社会学的の二つあり、前者についてはセーフティーネットが必要で、後者については価値観の転換が必要であると言っているのだ。宇野の要旨は、セーフティーネットがありさえすれば、フリーターという身分であることを本人の自由として認め合う社会ということである。

先述の荻谷の研究は、戦後の日本は教育のもつ選抜機能によって社会階層の再生産すなわち固定化が進み、学習時間の投入量が全体で減りつつ、階層差が拡大しているという知見を示したが、注目すべきは社会の下部層の生徒は努力を放棄することで自信を保持しているというデータであった。荻谷は、金子勝 (1999) の (努力のできる) 「強い個人」<sup>vi</sup> を前提とした教育のあり

vi 強い個人とは、短期だけではなく長期の将来をも合理的に見通して、かつ他者にかかわりなく自己利益だけを追求する「合理的経済人」のこと。『反グローバリズム』(p.153)

方に疑義を唱えたのだが、荻谷はことわってはないが（ことわる必要を認めないほど一般に当然視されているということだが）階層差の指標のノンマニュアル職／マニュアル職の前提は正規雇用である。ところが現代にまだ「強い個人」が何かを目指して「上がり」となる「大きな物語」の価値観が残っていたとしても、それは慣性にすぎない。このリトルピープルの時代では、強いが弱いではなく、ネット上でうまく繋がっている感覚が得られるかどうか重視される。アクチュアルの親疎／遠近の差は関係なく、コネクトしているというリアリティが得られればそれでいいということである。すなわち現代は、正規／非正規の差異は、関心としてはずっと後方に下がる社会である。

つぎにフーコーの近代権力論の切り口をクロスさせてみよう。フーコーは『性の歴史Ⅰ 知への意志』（1976）において権力の明確な定義づけをしていないものの、盛山和夫（2000）<sup>31</sup>によればフーコーの権力論の特徴は以下ようになる。第一にフーコーは、抑圧や法の関係とは異なる関係を権力という語で言い表そうとしている。第二に、とは言っても、ミクロの社会関係においてある個人が他者に対して有するような権力でもない。誰が権力者で誰が服従者であるということではなく、それは「無数の力関係」である。第三に、経験的に「権力」と呼ばれている現象のことでなく、それとは基本的に異なる現象に「権力（pouvoir）」という呼び名を与えている。それならフーコーはどんな現象を pouvoir と呼んだのか。盛山によれば、「ある言説が述べられ、真理として受けとめられるとき、それはそれを真理として受けとめた人々をしてその真理に圍繞させられ隷属せしめるという意味において権力の中におく」となる。「何かを真理として受け入れるということは、その何かに服従することだ。したがって、知（savoir）こそはまさに権力そのものに他ならぬ」。これが「知である権力」というフーコーの言葉の背後にある基本認識である、と。もし権力作用を、フーコーのそれとは異なって、主体Aから主体Bに働くものと定義すると、Bはやろうと思えばできること（savoir）を、Aから抑圧されて別のことしかできない（pouvoir の限定）となる。この場合、savoir の範囲と pouvoir の範囲が一致せず、savoir のほうが大きい。フーコーの場合は、しかし、真理の知によって自ら服従しているため、否、知は内面化しているため服従は無意識で、savoir と pouvoir の範囲は一致している。このとき、知の内面化には、学校、工場、等々での規律訓練が大いに機能したのであった。

現代の「拡張現実時代」のアーキテクチャも、できることをしている感覚をもてるので、savoir と pouvoir が一致している点は同じだが、そこにはもはや内面化のための訓育は必要ない。東はこの、アーキテクチャによる管理型権力を、「管理」では二十世紀の全体主義を想起させるので、アーキテクチャを環境と意識して環境管理権力と呼んだ<sup>32</sup>。規律権力の場合は、規格外（訓練不能）が排除の対象であったが、環境管理権力の場合は、アーキテクチャの設計段階ですでに排除が行われる。当然ながら被抑圧も不自由も感じないわけである。そのうえ、かかる現代の若年層労働者すなわち「多重人格」の労働者に見たら、正規／非正規の差異は時間の経過

とともに交替させるキャラの一つに過ぎない。このような環境管理形式の権力に対する労働者側の抵抗の形としては、権力保持者が可視であった時代の革命はもとよりデモやストライキもありえない。今や抵抗の可能性は、アーキテクチャ設計の段階で組み入れられなかった想定外行動に残されているのみである。

## 終わりに

以上、今の時代、正社員主義は、多くの若者にとって現実的背景からしても、彼らの価値観からしても徹底させるのは困難になりつつあることを見てきた。そもそも正規雇用が正常で非正規雇用が逸脱と捉える見方に無理があるのだ。八代尚宏は「日本的雇用慣行は文化だから変えられないという人がいますが、これは戦争遂行のためにできた『1940年体制』の一部」であり、それはたかだか70年の歴史しかないものであると指摘する<sup>33</sup>。戦前の日本の労働市場はもっと流動的だった、と。現在の派遣法は正社員主義が暗黙の前提であるため、企業の、非正規に傾く雇用行動を規制する側面からのみ検討され、労働者が派遣を選択できる可能性を減じてしまうことには無頓着である。様々な理由で「派遣がいい」、「派遣でしかできない」という労働者もいるはずなのに、である。「安定的雇用」の「安定」の意味も、終身雇用の正規雇用だけのことを指すのではない。雇用先が変わっても継続的に雇用状態にあるのなら、それは「安定的雇用」と呼べるのではないか。正規非正規を区別した対策より、必要に応じてどちらにも移動ができるような教育、法制、雇用制度、社会にしていこうと考えるときが来ていると言えよう。

児美川孝一郎（2011）は、卒業後非正規雇用にならざるをえない若年労働層の存在がキャリア教育から抜け落ちていることを問題視し、その解決を目指した結果つぎの提言を行っている。すなわち、将来における新しい「学校から仕事への移行」のプロセスをつくるための3つの指針である：①学校教育の職業的レリバンスの強化、②格差的な労働市場の改善、③職業能力開発に資する生涯学習社会の構築、である<sup>34</sup>。本稿も児美川の問題意識を共有しており、今後のキャリア教育のふさわしいあり方を見通ししたいのだが、その結論が①の学校教育の職業的レリバンスの強化、では不足である。なぜなら荻谷の知見から、教育により階層が再生産され、業績主義を離れることで自信を保持する生徒の存在を知ったからである。荻谷に従えば、非正規予備軍とも言える一部の現役生に対するこのようなキャリア教育、さらには卒業後非正規になった彼らに対する再教育のための支援政策は失敗に終わるだろう。荻谷の仮説では最も教育を必要とする人に教育が届かないからである。しかし、無競争で入学できる短大（荻谷の調査結果からの仮説が正しければ、努力を回避する学生の集団となる）の教員として、ある時期までは就活に対して無気力無関心だった学生も、急速に顔つきまでも変わって成果をだしてくる様子を目の当たりにすると、人間のもつ可塑性や人生キャリアは出自だけでは決まらない多要因相互依存モデルであるこ

とに改めて思い至ったりもするが(だからこそ「ロストジェネレーション」説は成立しなかった), それを言い出したら調査研究は不要ということになってしまう。やはり説明変数は明らかにしたい。

現代の若者は新しいテクノロジーに支えられたケータイ端末によって、「6次の隔たり」で世界中につながる手段を、目的より先に手にしている。彼らはキャリア・プランがあって、それに合目的に行動するというよりも、数次のつながりの上に思わぬ展開があるという、縁起的行動でキャリアを形成していくだろう。人生は出会いであると昔から言われてきたが、その出会いの範囲が桁外れに大きいのが現代である。この量的変化が質的变化をもたらし、これが宇野の言う価値観のシフトである。「富国強兵」の国策のもと人材を養成できたのは「国境」があった時代のことであって、新しい時代のキャリア教育は、つながりのためのリテラシー、倫理なのかもしれない。

#### 【参考/引用文献】

- 1 宇野常寛 2011年 ゼロ年代の想像力 早川書房 p.416
- 2 児美川孝一郎 2011年 若者はなぜ「就職」できなくなったのか?生き抜くために知っておくべきこと 日本図書センター 第1章
- 3 宇野 上掲書 pp.416~417
- 4 太郎丸博 2009 若年非正規雇用の社会学—階層・ジェンダー・グローバル化 大阪大学出版会 第4章
- 5 荻谷剛彦 2001年 階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ 有信堂
- 6 同上書 p.199
- 7 東京新聞 文化面 2011年11月5日付け
- 8 見田宗介 1995年 現代日本の感覚と思想 講談社学術文庫
- 9 大澤真幸 1996年 虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争 ちくま新書
- 10 同上書 pp.39~40
- 11 東浩紀 2001年 動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会 講談社現代新書
- 12 佐々木敦 2009 ニッポンの思想 講談社現代新書 p.304
- 13 東浩紀・大澤真幸 2003年 自由を考える—9・11以降の現代思想 p.18
- 14 東 前掲書 p.125
- 15 宇野 前掲書 p.190
- 16 岡田斗司男 2011 評価経済社会—ぼくらは世界の変わり目に立ち会っている ダイアモンド社 P.246
- 17 宇野 前掲書 p.405
- 18 同上書 p.407
- 19 同上書 p.104
- 20 同上書 p.410
- 21 同上書 pp.411~412
- 22 同上書 p.412
- 23 宇野常 2011 リトル・ピープルの時代 幻冬舎 p.400

- 24 同上書 p.9
- 25 同上書 p.401
- 26 同上書 p.425
- 27 岡田 前掲書 P.231
- 28 宇野 前掲書 p.354
- 29 同上書 p.355
- 30 中央公論 2011年10月号 「著者に聞く」 pp.246~248
- 31 盛山和夫 2000 社会科学の理論とモデル3 権力 東京大学出版会 pp.7~8
- 32 東浩紀 2007 情報環境論集 東浩紀コレクションS 講談社 p.49
- 33 海老原嗣生・荻野進介 2011 名著で読み解く 日本人はどのように仕事をしてきたか 中公新書ラクレ p.280
- 34 児美川 前掲書 p.217